

善知識に親近せよ

中国の孔子の指南を集めた『論語』という書き物がありまして、長い間、中国や、日本におきましても、人の道、あるいは道德、政治その他、様々な生きていく上において、一つの指針になってきた書物がございます。

この中に、特にどういう友達が人生にとって役立つ友達であるか、どういう友達は避けるべきであるかということが説かれております。良い友達といたしましては、

「直^{チカク}きを友とし、諒^{リョウ}を友とし、多聞^{タモン}を友とするは益^{ユタカ}なり」（論語 李氏第十
六）

ということを孔子は言っております。

一つ目には「直^{チカク}き」ということは正直な人ということです。人間性の真つ直ぐな、心の正直な清らかな人は、良い友としての値打ちがあるということでありませう。

二つ目には「諒^{リョウ}を友とし」、「諒^{リョウ}」とは、あきらむ（察する）おもいやる誠実ということでありまして、今日、皆様方の周りにおいても誠実な人というものは、数少ない友として貴重なものだと思います。

三つ目には「多聞^{タモン}を友とするは益^{ユタカ}なり」。「多聞」というのは非常に見聞の豊かな人です。その方と話し合いをする。あるいは、会うたび毎に、何かしら新しい知識やアドバイスや、役に立つ、あるいは参考になることが、その人との触れ合いの中から学び取ることのできるような人、そういう人は素晴らしい友達の一人と言えると書かれています。

反対に、お付き合いをすると損をするといいますが、付き合い値打ちもな
いという友達としては、

「便^{ベン}辟^{ペキ}を友とし、善^{ゼン}柔^{ジュウ}を友とし、便^{ベン}佞^{ネイ}を友とするは損^{ソン}なり」（同上）

ということを言われております。「便^{ベン}辟^{ペキ}」というのは、非常に世慣れていて、権力だとかお金だとか、色々なそういうことに媚^コび諂^{テン}う人、そういう癖^{ヘツラ}のある人、そういう人達と付き合いうと、どこかで、いつか必ず破綻^{ハツタン}をきたす。

また「善^{ゼン}柔^{ジュウ}を友とし」、如何にも人当たりが柔らかい、穏やかな善い人のように見えるけれども、やはり心において、不誠実な点があったり、何となく心に純粹性が見られない、少し心が捻^{ネジ}れていて不正直であるというような人。見せかけの表面は穏やかで立派そうに見えていても、本質的に内心が正直でない者、本当の信頼が持てない、そういう善柔を友とするのは損である。さらに一番悪いのは「便^{ベン}佞^{ネイ}を友とする」、誠意がなくて口先だけが達者な人です。表面上の取り繕いが上手であるけれども、本当の心が無いという人です。そういう人を友とすると損である。やはり生涯を通じての良い友とすることはできないということを言われています。

たしかに、こうした孔子の『論語』の言葉も非常に参考にはなりますが、

これはどちらかと言うと、ごく世間一般のお付き合いの中で、一つの道徳的な在り方としての教えとしては、『論語』には『論語』としての値打ちはあると思います。しかし、その『論語』の範疇ハシヤクをもって、私達の信心の世界までそれを鵜呑みに採用することは、多少問題があるとしなければなりません。

付き合いの中での参考にはなりません。この言葉が即、私達の信心の上にとつてどうかと言うと、信心の上からするならば、もつともつと深い法華經の道理の上から物を見、また仏法の世界は最高の覺りを開かれた仏様の教えの世界でありますから、正しく仏様の教導・指南に従うことが根本になる。

法華經においては、悪知識と善知識ということが問題にされております。

『法華經譬喩品』の中に、

「悪知識を捨てて善友に親近するを見ん」（妙法蓮華經並開結二四七ページ）
ということを言われております。

この『法華經譬喩品』の御文を引かれて、大聖人様は『蓮盛抄』とか『日女御前御返事』等々におきまして、この文を、

「悪知識を捨てて善友に親近せよ」（平成新編御書一九ページ）
というふうに御指南あそばされていらつしやるのであります。

この仏法の世界におきましては、爾前權教のみならず、今日 我々の住んでいる世界における一切の仏法上の悪知識、つまり他宗他門の僧侶や、あるいは、それに連なる爾前迹門の邪義に執着している人、そういう人達の悪知識に従つてはいけない。どこまでも仏の眞実の教え、その正しい仏の教導、また、その教導に連なるところの信徒、在家における私達同行の善知識、お互いに支部なら支部、講中なら講中の立派な先達の善知識に従つて、そういう人達に親近することが大事だということを、大聖人様は言われおります。

しかも大聖人様は『蓮盛抄』に、

「凡そ世間の沙汰、尚以て他人に談合す」（同上）

と言われまして、世間一般の事柄にいたしましても、やはり代表の方達、あるいは様々な企画や物事を計画するときには、きちつとお互いに関係者が集まって話し合いをして、本筋を見極めて物事を実行していくわけであります。ましてや、この仏法においては、

「況や出世の深理、寧ろたやす輒く自己を本分とせんや」（同上）

と、仏様の教導の世界は自分自身の我見を振り回してはいけません。どこまでも信心の世界は仏の教導に従う。それが根本だということを大聖人は説かれております。

この仏法の深い道理を自分の我見で、いかにも分かったかのごとくに、また自分の我見を中心にして仏法を判断するということは、大きな間違いであります。仏法の教義の正邪、浅深、あるいは御本尊の法体の教義は、やはり仏様の正しい教導に従うべきであつて、自分の心、自分の我見の判断は、

きっぱり捨てていかなければならないのであります。そうした意味で、大聖人様は、どこまでも正しい善知識に親近しなさいということをおっしゃっておられるのであります。

善知識には、先ほど申しましたように、根本は師の善知識、日蓮大聖人様の善知識、そしてまた、それに連なる大聖人様以来の正しい血脈の相伝をお受けになられた御法上人人猊下を中心とする、その時その時の御法上人を中心とする日蓮正宗の集団の同行の善知識、お互いの異体同心の信心に立った善知識に従っていくということをお忘れはならないのであります。

自分の我見もいけません、尚更その信心を迷わすところの悪知識は、断固として排除していかなければならないということが、仏法の信心の世界の鉄則であるということをお申し上げたいと思っております。

その証拠として、大聖人様は『立正安国論』にしる、『守護国家論』、あるいは『顕謗法抄』『唱法華題目抄』等々の御書の中に、有名な『涅槃経』の悪象と悪知識とを対比してお説きになった御文を引かれております。

つまり、

「菩薩摩訶薩悪象等に於ては心に怖畏すること無かれ。悪知識に於ては怖畏の心を生ぜよ。乃至、悪象の為に殺されては三趣に至らず、悪友の為に殺されては必ず三趣に至る」（平成新編御書一四八ページ）

例え象に踏み殺されることがあっても、そういう悲惨な最期を迎えた人でも、地獄に墮ちることはない。しかしながら謗法の悪知識に惑わされて、心も命も全体を悪知識に犯されてしまった人は、悲しいかな、その人の境涯は現当二世にわたって、地獄・餓鬼・畜生の境涯に墮ちてしまうということをお言われているのであります。

今の言葉で言うところ、交通事故や色々な突発的な事柄によって、例え命を失うことがあっても、地獄に墮ちることはない。しかし、悲しいかな、謗法の汚れによって、そういうものに紛動されていくなれば、その人の境涯は長く地獄・餓鬼・畜生の三悪道の苦しみに遭わなければならないということをお言われているわけでありませぬ。

そうした意味で、私達はどこまでも善友に親近し、善知識に従い、そして悪知識を排除して、正しい仏様の教導に従った清らかな信心を全うすべきであります。これが仏法の信心の世界の大鉄則であるということをお深く心に置いていただきたいということをお申し上げまして、本日の法話に代えさせていただきます。